Title	小崎弘道著「系統神学講義」について
Author(s)	鵜沼，裕子
Citation	聖学院大学総合研究所, No.31, 2005.1：105-113
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4274
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

小崎弘道著「系統神学講義」について

鵜沼裕子

かれこれ20年近く前のことになるが，さる出版社で，小崎弘道の全集（警醒社『小崎全集』）全6巻を復刊するという企画が立てられた。そのさい，第1巻『基督教の本質』に収められている5編の論考のうち，「マルコ傳註解」を除いた4編に，同志社大学に所蔵されていた小崎の自筆原稿「系統神学講義」を新たに加えて，新版第1巻とすることとなった。そして自筆原稿を印刷のための原稿に起こす作業を私が担当し，すでに4校を終えるところまで進捗していた。ところが，諸般の事情からこの企画が挫折のやむなきに至り，その後，このようなものを単独で公にする場がないままに，原稿は15年余も拙宅の仕事部屋に眠ったままとなっていた。

このたび「日本研究」の資料として，思いがけず，総合研究所の紀要に載せることとなった。そこで，その当時作成した『第1巻』のための「解題」をもとに書き改めた解説を付して，ここに収録していただくこととした次第である。

1 「系統神学講義」について

本書は，同志社大学神学部研究室所蔵の『小崎弘道自筆集』全70巻のうちの第49巻に収められている。英語の題名はLectures on Systematic Theologyで，大学ノート2冊に，140頁にわたって黒インクで書かれている。詳しい成立事情は不明であるが，執筆の時期は，原本ノートの裏表紙に記載されているところによれば，1924年から25年（大正13～14）にかけて書かれたものと思われる。小崎は1908年（明治41）に東京伝道学校を閉鎖したのち，日本クリスチャン教会経営のクリスチャン神学校やバプテスト神学校などで教鞭をとっていたが，その後自ら霊南坂神学校を開設し，1921年9月にその仮開校式が行われ

た。同校は，まもなく資金不足から経営難に陥り，1926年ごろまでしか継続せず，その間に送り出した卒業生も数名に過ぎなかったようである。しかし，ともかくこの間に小崎自身も教師として講壇に立っていたので，本書はその時の講義草稿として作成されたものと思われる。従って，このまま上梓することを考えて執筆されたものではなく，話のポイントだけを箇条書きにしたと思われる部分などもあり，さしあたり講義ノートとでも称すべき性格のものであろう。

内容の解説に先立って，書誌的な説明と，印刷にあたっての原則等について記しておきたい。

○欄外余白の数字は，原本の頁数を示す。ただし，小崎自身が記入しているのは82頁までである。

○目次に載っている「第三篇　人類論」と「第四篇　罪悪論」は，本文が欠落しており，原稿が紛失したものと思われる。また，「第二篇　有神論」は最後の部分が完結していないので，第二篇も後半の一部が失われたのであろう。ただし，原本の頁数は連続しているので，何らかの理由で削除されたことも考えられる。

　なお，目次の「第七篇　聖霊論」，「第八篇　来世論」が，本文ではそれぞれ第五，第六篇となっているが，これは目次の方に合わせて訂正した。

○欧文・和文ともに，明らかな誤記・誤字と思われるものは訂正した。また，脱落と思われる文字は（　）内に補った。

○句点は，原文ではほとんど用いられていないが，読みやすさを考えて補った。なお読点も，名詞を列挙するような場合以外はほとんど使われていないが，これは加筆しなかった。

○濁点もほとんど使われていないが，これもわかりやすさのために施すこととした。

○仮名遣いは原文のままの旧仮名遣いとしたが，漢字については原則として当用漢字に改めた。

○最初に文語体で書かれ，あとから口語体に修正されている部分がかなりあるが，全体としての統一や格調を考慮して，もとの文語体の方を採用した。そのさい，修復部分は※印で示した。

　例　為す可きでない　→　為す可らず

ただし修復不可能な部分や，書き換えによって意味も変わっている場合は，口語体のままとした。

○聖書の引用部分については修正等は行わず，すべて原本のままとした。読みにくい字には（　）に入れたルビを付した。なお，ルビはすべて校注者によるものである。

○聖書の章・節は，主として（章）。，（節）・の記号で示されている。

例　太一。一・（マタイ伝一章一節）

○欄外に記入されている語句については，できるだけ原本に近い形で余白に記した。

○原則として，できる限り原本に近い形を残すことに心がけた。

次に，内容についてみていきたい。

小崎はまず神学を，通例の分類法に従って，解釈神学（聖書神学），歴史神学，教理神学，実践神学の四部門に分かつ。このうち「系統神学」は，「弁証学」および「基督（キリスト教）倫理学」とともに第三の「教理神学」に属するものとされている。Systematic Theologyは今日，邦語では組織神学と称されるが，組織神学は通常，教義学，倫理学，弁証学を含む神学理論の総称であるので，小崎のいう「系統神学」は，今日の用語で言えば教義学にあたるものと言えよう。ただし第一篇では，キリスト教的有神論と近代思想との調整が試みられるなど，内容的には弁証学的な要素も含まれている。

「系統神学」の内容は，緒論，有神論，人類及罪悪論，基督及救拯，聖霊論，来世論の六章に分かたれる。これも教義学の通例にほぼ従ったものであるが，キリスト教神観や教会論が含まれず，代わりにキリスト論に関する記述にかなりのウエイトが置かれている。これは小崎の他の神学的著述にも共通してみられる特色である。聖霊論と来世論については，これまでに公にされている著作ではほとんど触れられていないので，本書からこれらについて多少ともまとまった形で知り得る手がかりを得たことは，小崎研究にとって意味のあることと言えるであろう。

さて，緒論において小崎はまず，系統神学を「基督信仰の教理を学理的に真理として論述するの学」（117頁）と定義する。小崎によれば，キリスト教信仰は，キリスト自身の教えに始まり使徒らの体験と宣教，さらにキリスト教会二千年の歴史にもとづく。そのうち，キリストおよび使徒らの信仰を研究するの

が聖書神学で，教会の歴史を叙述するのが「教理史」の仕事であるのにたいし，系統神学の役割は「今日の教会信仰意識の教理を研究説明」するにある（119頁）。系統神学の成立根拠に関しては，これを聖書や教会的伝統，あるいは理性に求めるなどの種々の立場があるが，それらはいずれも絶対の根拠とはなりえない。なぜなら，聖書や伝統に基礎を置くとしても，その解釈は，最終的には理性の判断にまたねばならないからである。とはいえ，単なる理性は宗教上の真理の判断者としては不十分である。音楽や美術の評価にはそれぞれ音楽的，美的批評眼を必要とするように，「宗教上の真理を判断するには宗教的意識即ち宗教的理性を要す」る。ゆえに，「系統神学の根拠は信仰即基教的意識にありとなす最も理に叶へるが如し」ということになる。

このように，小崎における系統神学は信仰の内容の学的論述であるが，その成立根拠そのものは「宗教的理性」，すなわち信仰者の意識の側に置かれている。従って小崎の方法的態度は，啓示そのものから出発してその内容に学的表現を与えるというよりは，むしろ人間の理性に根拠を据え，それによって啓示内容の真理性を基礎づけようとするもので，その意味で宗教哲学の方法に近づくとも言うことができよう。そうした姿勢は，例えば「神」を論じるさいに，キリスト教神観としてではなく，有神論として取り上げる，という仕方にも現れていると言えよう。

続く人類論，罪悪論の部分は，残念ながら本文が欠落しているが，同じく霊南坂神学校の講義草稿として作成された「神学概論」(1922年4月，『小崎弘道自筆集』第46巻所収）の中に，ノート一頁余りの簡略な記述ではあるが，「人性論」と題された一節がある。そこには，(1) 創世記第一章二十六，七節に人は神のかたちに造られたとあり，これが聖書の人性論の第一義であること，(2) 人間は肉体Body，心意Mind，霊能Spirit，の三つからなるとするのが聖書の人性観であること，(3) 肉体は滅びるが霊魂は不滅であること，(4) 堕罪はキリスト教会の重要な教義であり，経験上も，人が罪への傾向性をもつことを認めねばならぬこと，の四項が列記されている。「系統神学講義」の欠落部分である人類論，罪悪論の内容も，ほぼこれと等しいものであったのではないかと推測される。

続く第五篇，第六篇はキリスト論であるが，「第五篇　基督論」は，量的にはかなりの部分を占めているものの，内容は『基督教の本質』その他と重なるところが多く，特別の新しさはみられない。ただ第八十八章以降の受肉論は他

の著作には見られぬもので，簡略な記述ではあるが，受肉の教義の解明を通して，イエスが「神人一体の救主」であることが示されている。

本書のキリスト論が他の著作のそれと異なる主な点は，むしろ「第六編　救済論」に見られる。他の著作では，キリストの死による罪の贖いということは，一応押さえられてはいるが，復活のキリストの現存が信仰生活の活力源であると説くことにもっぱら力点が置かれ，十字架の死による罪の贖いの意義はそれほど明確に説かれていない。しかし本書では，キリストの死は「尋常一様殉教者の死」とは異なり，「吾人の罪の為の挽回の祭物」としての死であって，救済は，キリストの「教訓，性格，死及び復活」の四者が一つとなることによって全うされる，ということが明示されている（以上，158，160，161頁）。

「第七篇　聖霊論」と「第八篇　来世論」の内容は，本書固有のものと言ってよいであろう。「聖霊によりて聖められたる理性」とは小崎の信仰の立脚点であり，聖霊は彼の信仰思想の重要な要素であるにもかかわらず，これまでに公にされた著作には聖霊についてのまとまった記述がほとんどなく，この点に関する小崎の理解を知る手がかりはきわめて少なかった。内容は，まず聖書における聖霊の呼称の列記に始まり，世界，教会および信徒における聖霊の働きについて述べられている。第百十五章以下では，聖霊と信徒の生き方とのかかわりについて，かなり詳細に述べられている。第百二十七章以下の，聖霊の神格化に関する記述については，次の項で改めて触れることとする。いずれも，聖霊を重要な内容とする小崎の信仰思想の全体を知る上で，重要な手がかりとなるであろう。

「第八篇　来世論」では，いわゆる千年王国説や最後の審判をも含めて再臨説に触れているが，これらも他の著書には見られぬものである。

2　小崎弘道の神学思想

次に，小崎の思想全体の中での本書の位置づけや意味を知る上で，小崎弘道の神学思想全体について概観しておきたい。

一般に小崎弘道の神学思想は，極めて穏健な福音主義的信仰を基調とするものであったと言われている。彼には内村鑑三の徹底した十字架信仰も，植村正久の武士的な厳格主義も，海老名弾正の特異な宗教体験もない。そこには強烈

な個性に根ざす顕著な特色は見いだされず，率直に言って読む者を魅了する力には乏しいが，それだけに一種の安定感があり，いずれの極端にも偏らない健全さを特色とするということができよう。

小崎がキリスト教信仰を受け入れた前後の経緯を見ても，そうした彼の性格をすでに読み取ることができる。彼は初めてL. L. ジェーンズを介してキリスト教に触れたとき，「多少儒教の素養もあり又色々な理屈を学んで居った為」，仲間たちのように単に国家のためとか修身のためというような「単純なる心」をもってこれを信じることができなかった。入信に至ることができず苦悩するうちに，ジェーンズから「神の情は神の霊の外に知るものなし」という聖句によって諭されたとき，「翻然悟る所」があって信仰心を起こすに至った。

しかしこのときも小崎は，例えば海老名弾正の場合のように，この覚醒をいわば一回的な原体験として，一転して新生活に入ったわけではなかった。その後も時代の諸思想がキリスト教に提起してくるさまざまな難問に直面し，不断の読書や思索によって，この新たな信仰の吟味検討を，入念に重ねていったのである。

よく知られるように，小崎は自らの信仰上の立場を最終的に確立するまでに，三つの問題を乗り越えねばならなかった。その第一は「理科学及哲学と信仰の関係問題」で，第二は「聖書論と信仰の関係問題」，第三は「基督教とは何ぞや」という問題であった。このことについてはすでにしばしば論及されているので，ごく簡単に要点のみを述べれば，まず第一の問題とは，現代自然科学，とりわけ進化論とキリスト教との関係，そして近代哲学とキリスト教的有神論との関係の問題である。これは，入信までの小崎をもっとも苦しめた問題であったようで，彼自身，「私は此の為頗る困惑し，其結果脳を病んだ」(「七十年の回顧」，『小崎全集』第3巻25頁）とまで述懐している。第二の問題は，いわゆる聖書無謬論への疑問を契機として生じた，聖書に対していかなる姿勢で臨むべきかという問題で，これにたいする小崎の解答が「聖書のインスピレーション」(『小崎全集』第6巻所収）説である。第三の問題は，いわゆる新神学・自由神学の移入によって旧来の正統派神学にもとづく信仰が揺らぎ，キリスト教の本質とは何か，という問いが改めて生じたことから起こった問題である。

このように小崎は，時代の哲学的・神学的動向にたいして常に関心を寄せながら，それらの時代思潮から次々と提起される「難問題」にそれぞれ納得のい

くまで討究を重ね，それらをひとつひとつ乗り越えながら，自己の信仰的立脚地を着実に固めていったのである。それは，特異な宗教体験にもとづいて構築された独自の世界といったものではなく，また人生上の悩みの解決をキリスト教に求めて到達した境地でもない。それは，啓示内容を，知情意を兼備したすべての人格によって承認され得る仕方で提示することを目指した学的な試みであった，ということができよう。したがって小崎の場合，「私が終始一貫今に至る迄何等信仰上の変動を見ないのは，全く最初信ずるに容易でなかったお陰である」と述懐しているように，ひとたび確立された信仰的立場の基調は，生涯変わることがなかったのである（引用は，『小崎全集』第3巻所収の「予が信仰の立脚地」より）。

とはいえ小崎の神学的作業は，単にキリスト教の啓示内容を当代風に教科書的にアレンジしたにとどまるものではなかった。彼の仕事の根底には，常にこれを支えるひとつの確固たる支点があったのであり，それが彼のいう「聖霊によりて聖められたる理性」（前掲書）であった。

前述のように小崎は若いころ，ジェーンズによって「神の霊」に目覚めさせられたことが信仰の道に踏み出す決定的な端緒となったのであるが，その後，改めて前述の諸問題と取り組むうちに，「霊によりて聖められたる吾人の理性即ち吾人の宗教的意識」こそが信仰の「究極の標準」（「予が信仰の立脚地」）であるという確信を得るに至った。では聖霊についての小崎の理解はどのようなものであったのか。

小崎は近代思潮，とりわけ進化論とキリスト教との調整問題に苦慮することを通して，「神の内在（インマネンス）の理」（「我国の宗教及道徳」），『小崎全集』第3巻所収）への確信を深めていった。神は人類を創造し終わったのち，世界に超絶して人類を放任する神ではなく，人間世界に内在してこれを内部から化育する神でもある。そして，その働きをなすものが聖霊である。彼はいう，神の遍在内住は近世神学が明らかにしたところであり，聖霊は，人がそれを聖霊と自覚するか否かにかかわらず，天地万物に内在して働いていることを認めざるを得ない，と。

ここで重要なことは，この内なる霊の力が，単に人間性一般が共有する普遍的霊性のごときものではなく，三位一体の一位としての「聖霊の神」であることが明確にされていることである，「系統神学講義」の第七篇「聖霊論」では，特に「聖霊の人格」についての章が設けられ，次のように言われている。聖霊

を単に神の動作のひとつと見做すのは最も理解しやすい見解ではあるが，聖書の記述と教会の歴史的信仰に照らしてみれば，そこには聖霊をもって三位一体の神の一位と認める信仰のあることが明白であると言わねばならぬ。聖霊の神は人を罪の自覚へと導き，彼に新生を与え，神と共なる生涯を送らせる。

聖霊はまた教会に働いて人々に真理を悟らせ，信仰の復興を起こす。そしてさらに三位一体説について哲学的神学的解説を試みつつ，次のように聖霊論を結んでいる。「近世の神学は神の内住（Immanence）に最も重きを置く。然れども内住なる思想は聖霊の神の信仰によりて始めて全ふせらるゝものなり。中略。聖霊なる神の信仰は父の神も子の神も現在吾人の衷に在する自覚を与へ信仰の活動を全ふせしむるなり」（185頁，傍点筆者）。

このように，小崎における聖霊が，聖書に明示され，歴史的教会の伝承する三位一体の一位としての神であるなら，彼のいう「聖霊によりて聖められたる理性」は，単に人間一般に生得的な宗教意識，宗教的心情に支えられた理性を意味するものでないことは明らかであろう。それは神の子イエス・キリストの贖罪の死と復活の信仰を告白し，しかも近代的知性の容認する諸思想と共存し得る理性をめざすものであったのであり，このことは小崎弘道の神学思想の中で，特に銘記されるべきことであると考える。

なお，ここでもう一点つけ加えておきたいことは，「宗教的意識」とは単に個人の主観的な意識ではなく，他者と共有され得るものでなければならないことが強調されていることである。彼は言う，信仰の根拠となすべきものは外なる権威ではなく内なる実験でなければならないが，しかし単なる宗教意識は真理の基準とはなり得ない。信仰の真理性の基準を求めるには，われわれは他者の宗教意識，すなわちキリスト教1900年の歴史と，とりわけ使徒らの宗教意識に学ばねばならないのである，と。そして彼の関心は，常に個人としての霊的意識を深めることよりも，むしろ聖書と教会の歴史の吟味検討を通して，宗教的意識の内容の普遍性を確かめる方向に向かったのであった。小崎をして終始一貫，正統的な福音主義信仰を貫かせた所以のものは，ひとつには，いたずらに自己の個性や情念に身を任せることなく，常に聖書と歴史の語るところに忠実に聴きつつ自己の立脚点を固めるという，地道な姿勢を保ち続けたところにあったと言えるのではなかろうか。

以下に，小崎弘道の自筆原稿から起こした「系統神学講義」の全文を掲載す

る。ご覧のように，小崎研究に関心をもつ向きには資するところも少なくないと考えるが，日本キリスト教史全般の観点からは，特に重い史料とは言えないであろう。まだワープロも一般的でない時代のことで手書きで起こした原稿であった上に，量的にもかなり大部のものであるので，これを印刷化することは大変に手のかかる作業であったとのことである。そうした労をもいとわず，本書が日の目を見るためにご尽力下さった方々に，心より感謝申し上げる次第である。